

## 山歩き　～自分との邂逅～

山中　歩

僕が三十代のある日、僕は大きな山を歩いていた。

きっかけはYouTubeで視聴した僕の思春期から青年期によく聴いたバンドのミュージックビデオだった。そのバンドの曲は暗い気分の上塗りになるのでいつからかずっと控えていたが、最近どうしているのか気になり当時検索した結果、まだ新しかったこの曲が出てきた。

その内容は昔に聴いていた通りのメランコリックで美しい曲の中、ボーカルのトム・ヨークがふらふらと歩いて色々な場所を通り抜け、最終的には雪山に入っていくというものだ。当時の僕はそれに感化されて山歩きを始め、大きな山はそこそこに近所の裏山へ度々入る様になるのだが、そこには言い知れぬ自由さが満ちていた。昔の僕がまだ小さい頃と思春期の頃に当時の友人らと入った裏山だが、昔より探索する興味は僕個人に帰して、行動できる範囲は広がっており、大人になった僕が独りでそこを歩く度に「自分の身幅」「自分の歩幅」で歩ける自由さなのだと思付く。

幼少から長らく僕は外部の正しさに縛られていた。社会性や社会通念、自分の属する環境からの影響は誰にとつての価値観だったのか。確かなのはどこからか連鎖してきたものが僕の中を流れていたということ。

それに愚直に従い、無様に抗い、時には間違いをしたこともあったが、自分の生き辛さは増すばかりであった。僕の頭の中で何もかもが僕を非難している様な状態に陥ることも度々訪れた。

僕が小学校低学年の時に書いた将来の自分へ宛てた手紙を読んだその日、それは僕の体を素通りした。

「大人になった僕は立派な人になっていると思います」

まるで焦点が他人に当てられたかのようだ。そのタイムカプセルに入っていた文章は僕が成人後にひきこもっていた二十代前半終わり頃に勇気を出して、まだ幼い僕が通っていた小学校へ取りに行ったのだった。小さな僕からのメッセージは何とも言いようのない、昔から自分には何かが足りないという虚を確認しただけだった。

そんな虚を抱えて大人になった自分の身幅や歩幅で歩いて行ける裏山探索はとても自由に思えた。進む方角や速さは自由で、行き止まりや発見も僕の行為から得られた結果であり、そこにあるのは後悔や恥ではなく、やり直しや修正、視界の開ける喜びだった。

裏山で僕は本当に独りで歩いていたから、誰の目を気にするのでもなく自然と行えた。斜面で転ぼうが、近くに潜んでいた脱兎の物音に驚いて声を出そうが、またすぐに山の静寂は



当たり一面に満たされていて、当時の僕にはそれがとても新鮮で心地よかったですのである。